

## 5 肥料

当研究所では、肥効調整型肥料\*（ハイコントロール トータル 391-270 270 日タイプ）を、元肥として培地に混合しています。「1年生コンテナ苗」の場合、1キャビティ当たり2g（80g/トレイ）以上とし（図-5-1、「2年生コンテナ苗」よりも多めに施肥します。

「2年生コンテナ苗」の場合、スギ、ヒノキともに、苗高がほぼ7～8cm以上あれば、1キャビティ当たり2g（80g/トレイ）でも、秋以降、苗長が山行き苗の規格サイズに達することが判明しています（図-5-2、-5-3）。苗長（苗高）が大きくなりすぎる場合、苗木の大きさに応じて1キャビティ当たり1～2gの施肥で様子を見ていくようにしましょう。

なお、肥効期間が700日タイプも発売されていますが、その効果については不明のため、当研究所が使用しています270日タイプの使用をお勧めします。

また、県内生産者では、緩効性肥料\*（IBS1号 大粒）を、年間、3～5回程度に分け、1キャビティ当たり1回に2～3個使用している事例もあります（後掲 図-12-3）。追肥\*のタイミングは、苗の葉色が薄くなった段階（脱色した段階）や、肥料の原形が認められない段階で行います。

さらに、培土中の肥料成分の濃度を確認する方法として、市販のECメーター\*（図-5-4）の利用がおすすめです。コンテナ育苗では、かん水の頻度や気象条件により、想定された肥効期間より早く肥料成分が流亡する可能性があるため、肥料濃度の測定により、追肥の的確なタイミングを知ることができます。一例として、HYPONEX（粉剤）を利用する場合の、濃度とEC値のグラフを掲載しておきます（図-5-5）。8月以降の追肥では、根系の発達を促進し、環境耐性を高めるリン酸やカリウムを主成分とする各種市販肥料の利用が推奨されています。



図-5-1 肥効調整型肥料（トータル 391）

左側：商品 中央：トレイ施用量（80g/40キャビティ） 右側：肥料の形状

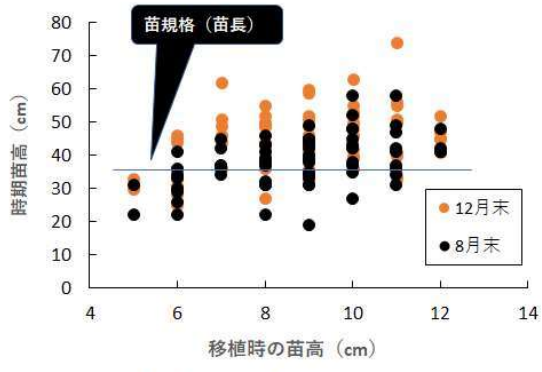


図-5-2 2年生少花粉スギコンテナ苗の時期別苗高

注. 1キャビティ当たりハイコントロール270日を2g使用

(説明)

少花粉スギでは、移植時の苗高が7~8cmあれば、かなりの割合で、12月には山行き苗規格に達します

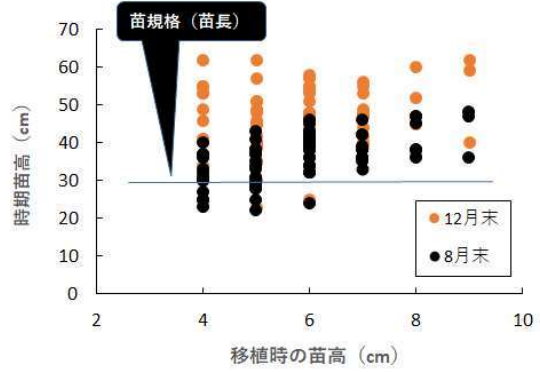


図-5-3 2年生少花粉ヒノキコンテナ苗の時期別苗高

注. 1キャビティ当たりハイコントロール270日を2g使用

(説明)

少花粉ヒノキでは、移植時の苗高が7~8cmあれば、すべての苗が12月には山行き苗規格に達します



図-5-4 ECメーターの利用例  
簡易肥料濃度計 CM-20 (竹村電機製作所製)

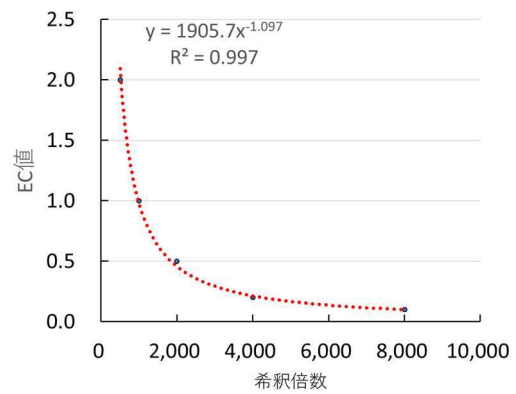


図-5-5 HYPONEX (粉剤) 濃度と EC 値